

一九五六年の県政を回顧す

1956年の県政ヒツクシ

- 1 県財政再建計画なる
- 2 八幡平国立公園に指定さる
- 3 岩洞ダム着工さる
- 4 町村合併計画九六%達成
- 5 農漁家振興対策樹立さる
- 6 酪農推進態勢大いに進む
- 7 宮古港の一万吨岸壁着工
- 8 製塩工場の設置決走
- 9 自衛隊の設置さまる
- 10 国営たばこ試験地の設置決定

一九五六年は県勢発展上特筆さるべき年であった。財政再建の問題、総合開発、町村合併の推進等、今後の岩手の進路を決定するといつても過言ではない幾多の難かしい問題があつたにもかゝらず、これが順調な歩みを続け得る態勢を築き、また懸案となつてきた岩洞ダムの問題等が解決するなど、県勢発展の基礎条件が整備された年であつた。

例年にならつて、一九五六年の県政ビツク・テンを選定する部長会議が十二月十一日開かれ、上記の十項目が選ばれた。その説明は次頁以下で行ふことにし

一九五〇年

- ①北上川総合開発二大ダム着工②医療公営県立病院の発足③釜石線の開通④岩手開発鉄道の一部開通⑤国有牧野四万町歩解放⑥国有林野解放請願の採択⑦釜石製鉄所の生産拡充⑧中尊寺の学術調査⑨盛岡鉄道管理局設置⑩食糧自給県となる。

一九五一年

- ①北上特定地域指定さる
- ②主畜農業園が確立する
- ③県営グラウンド発足する
- ④北岩手鉄道の計画なる
- ⑤盛岡短期大学設立せらる
- ⑥鉄道複線化着工せらる
- ⑦十キロ放送の工事着手さる
- ⑧商工館の事業開始せらる
- ⑨松寿荘、和光学園、静和病院など社会福祉施設の飛躍的充実⑩山王海ダムの完成

一九五二年

- ①「北上特定地域」国土総合開発の第一順位となる
- ②電源開発開始③オリビック選手招待陸上競技大会ひらかる
- ④大船渡市誕生⑤鉄道建設促進さる
- ⑥岩手丸の新造及び三漁港の修築起工さる
- ⑦大規模農業開発事業促進さる
- ⑧金融機関充実さる
- ⑨食糧移出県となる
- ⑩草地農業振興の対策進む

過去6年の県政要略

一九五三年

- ①冷害におそわる
- ②北奥羽地域開発計画概要なる
- ③国有林解放一万町歩達成
- ④電源開発進む⑤ジャージー種導入せらる
- ⑥ラジオ岩手発足⑦石淵ダムの完工と湯田ダムの着工⑧猿ヶ石川沿岸農業水利事業の着工と山王海農業水利事業の完工⑨全国勤労者陸上競技大会開かる⑩パン食モデル県となる。

一九五四年

- ①両陛下の御来県②国立公園「陸中海岸」国定公園「八幡平」の指定決る
- ③山田線の復旧なる
- ④新六市誕生⑤田畑ダム完工す
- ⑥北奥羽地域「調査地域」に指定さる
- ⑦国有林造成四十一年計画に着手す
- ⑧仙人トンネル貫通と県道の着工⑨十二万農家十二万畜畜単位確保す
- ⑩日独陸上競技大会盛岡大会開かる

一九五五年

- ①空前の大豊作②国民健康保険全県施行
- ③東北本線の複線化三地区着工④セメント増産態勢なる
- ⑤小野田、東北興業等⑥草地農業開発緒に着く
- ⑦二戸高原の世界銀行調査ならびに集約酪農地域の指定
- ⑧全国第二位の銅産県となる
- ⑨赤金、鷲合森、花輪等⑩さんまの大漁⑪県営発電の着工⑫労災病院、小児結核療養施設の設置決る
- ⑬県機構の改革なる

一 県財政再建計画なる

昭和二十九年末の県の実質赤字は約六億七千万円であつた。

この赤字発生の原因についてはいろいろ論議されているが、戦後の各般にわたる制度の改正によつて法令に基く義務的経費がかさみ、又相次ぐ水害、冷害等の災害の復旧に莫大な経費を必要としたにもかゝらず地方団体に対する財源の附与がその実態に即さなかつたことが最大の原因とされている。

ともかくこのように赤字をかゝえこんでいたのでは本来行ふべき仕事も充分できず、従つて県民の生活の安定も発展も望めないことになる。

こゝに地方財政再建特別措置法の適用を受けるべきかどうかということが財政再建対策委員会等まで設けられて研究された結果、四月三十日の財政再建対策委員会を受ける方が有利だと結論を出し、四月三十日開会の県議会にこれを提案、五月八日に適用を受けることが議決され五月十日には財政再建団体として正式に指定を受けた。

その後財政再建計画の作成を急ぎ七月二十六日の定例県議会にこの計画を提案



〔写真は国立公園八幡平の冬の景観〕

この財政再建団体として指定を受けるべきか、自主再建でいくべきかというこ

して審議を続け八月四日満場一致でこの計画が議決された。

この再建計画は政府の承認を得ることが必要であつたので、政府と接衝をつ

二 八幡平国立公園に指定さる

厚生省は七月五日国立公園審議会の答申にもとずいて八幡平地域を十和田国立公園に編入して、名称を十和田、八幡平国立公園に改めることを決め七月十日の旨告示した。

八幡平の国立公園への指定運動は古く戦前から行われていたが、県がこの運動を推進するための態勢を整え活動し始めたのが昭和二十二年からで、それからもすでに十年もたつてゐる。

国立公園は「国家的な大自然の風景地を永遠にわたつて保護し、これを国民の保健休養のために享用させ、日常体験しがたい偉大な靈感を与えるとともに、自然の観察、研究、鑑賞に備える」という目的でもらうける公園であるといわれている。

八幡平の景観はまことに雄大で原始的清浄さに富み、而も多種多様な火山地形と豊富な植物相とは独自の景観を構成す

との問題の一番大きなものは、再建法の適用を受けた場合に指定事業がどれくらいやれるかということ、即ち適用を受けるとすれば原則として基準年度の事業量の七五%に事業量がおさえられ、そのかわり補助率を二〇%だけ増加するということであつたので、岩手県の場合いづれをとるべきかということであつた。

しかし、その指定事業も基準年度の百

十三・七%の承認を得、そのほか指定団体になつたための恩典である補助率の二〇%増加分一億二千六百万円と再建債の利子補給二百万円、それに赤字を一時に解消できるということ等、すべてが有利に決つたことは今後の県政をより明るくものとし、県勢発展を約束さるべきスタートをきつたといつても過言ではない。

即ち火山、高原、湖沼、溪谷、湿原、原生林、御花畑、温泉等によつてかもし出される総合的な原始風景地で、その優秀な自然美は本邦風景地中第一流のものであるとされている。

ともあれ、永年の念願であつた八幡平国立公園が実現し、国の手でその景観が保護されることは県民ひとしく喜こんでいふことと思ふ。

これで岩手県には陸中海岸とともに二つの国立公園ができた。

七月二十八日には秋田、岩手の両県知事が八幡平頂上で万感胸にひめて堅い握手をし、八幡平国立公園の実現を喜び合う記念の式が行われた。

今後私達県民も国立公園としてふさわしい八幡平に守り育てることに努力しなければならぬと思ふ。このことは本年県政上大きい収穫であつた。

三 岩洞ダム着工さる

岩手山麓開発の主軸をになうとともに
県営発電の原動力となる丹藤川岩洞ダム
が遂に着工された。

この岩洞ダムの計画が樹てられたのは
昭和二十六年で、それ以来農林省と県の
費用分担がきまらなため本格的に工事
が始められなかつたものであるが、これ
がまとまり、待望久しかつたこのダムの
起工式が十月十日現地において行われ、
本格的に工事がはじめられた。

山麓開発の総工費は六十
七億九千万円、そのうち農
林省は二十五億九千万円、
県は四十二億円となつてい
るが、このうち発電関係の
費用は三十四億円となつて
いる。

岩洞ダムの型式は土石堰
堤で堰高は四十二米、堰長
は三百五十七米、堤頂巾は
十米、堤体量は八十四万八
千立方米、貯水量は六千五
百万立方米、満水面積は五
百七十七町歩となつてい
る。

このダムは土石堰堤とし
ては日本最大のものである
といふ。



12月3日行われた町村合併功労者表彰式

本一の高落差発電所になる大平発電所が
計画されている。

発電は県営で行うもので、当初大平、
中里、柳平の三カ所を予定していたが、
発電コストをさげるために、新大平と柳
平の二カ所にする事になった。

発電量は最大三万七千キロワット、年
間発電換算電力量は二億一千四百二十万
キロワットアワーとなつてい

四 町村合併計画九六%達成

このほか岩手山麓四方八千町歩の開発
が進められ、開田地区三千町歩からは水
稲七万五千石、開地地帯からは豆類その
他雑穀九万二千石(以下米換算)馬鈴薯
一万四千石、蔬菜九千石で合計約十九万

石の莫大なものが生産され、又、乳牛の
導入により牛乳約四万石が生産される等
の端緒をつくるものとして、岩洞ダムの
本格的着工は今年の県政上特筆すべきも
のである。

地方自治体にとつて赤字処理の問題と
ともに最も重要な問題として進められて
きた町村合併は、今年の九月三十日現在
で県の合併計画に対し九六・四%の進
捗率を示している。

計画に対しては百七%県の計画に対して
は九六・四%の進捗率を示している。
たゞ、まだ未合併として残っている地
区は、岩手西根地区、北上地区、和賀西部
地区、東磐井西部地区、下閉伊東北部地
区、下閉伊北部地区、九戸中部地区、二
戸北部地区、二戸南部地区の九つの地区
が残っている、残つたところはそれぞ
れ各町村特有のむずかしい問題をかかえ
て、この合併は相手方のある問題で
あつて、自己の町村の希望通りにばかり
進められるものではなく、やはり相互に
協調して円満な妥結点を見出していか
なければならぬのであつて、これは関係
町村だけの話し合いではその解決が難しい
ことが多いので、第三者である県の斡旋、
調停の果た役割がきわめて大きくなつて
くる。

町村合併のそもそものねらいは現在の
社会圏なり経済圏の拡大に即応して行政
圏を拡大しようといふのであつた。
岩手県の町村合併は関係町村の自主的
な熱意によつて、昭和二十九年四月一日
の水沢、花巻、北上の三市及び岩手郡玉
山村の合併を皮切りに極めて順調に進行
し今年九月三十日の千厩、岩泉、花泉、
安代の各町、三陸、川崎、西根の各村の
誕生までの間に一五二町村が減少し、昭
和二十八年十月一日町村合併促進法が施
行された当時の二百二十一市町村が現在
十一市、二十七町、三十一村となり、国の

としても酪農の占める地位は重要だとい
うので、酪農の推進には大いに力をつく
して来た。今年、まず牛乳の公正円滑
な取引と乳質の改善をめざして八月十五
日から県営の牛乳検査を始め、また、既指
定地域のほか種山高原、早池峯山麓、九
戸高原を集約酪農地域として正式指定を
受けられるよう整備し、草地農業の確立
乳牛の大量導入、酪農技術の浸透態勢な
どめざましい進展ぶりを見せている。

五 農漁家振興対策樹立さる

過去の農政はとかく三割農政といわれ
ていた。

即ちいかなる補助、融資その他の施策
がとられても、それを受入れる基ばんの
ない農家が七割もありそれらの施策が素
通りして行くといつたり零細農には全
く関係のないものであるといふのである
岩手県の場合農家の五割強が一町未満
であり、一町五反未満には七割弱の農家
が分布しているし、専業農家は四割以下
である。

この対策では一戸一戸の農家の庭先に
農業政策は農民政策として直結し多数の
中小農が働きがいをおぼえながら経営
し、生きがいを感しながら生活できるよ
うになり、ひいては農業の発展となり村

六 酪農の推進態勢大いに進む

岩手県の産業のうちで農業の占める地
位は非常に高くしかも全人口の約六割は

や果の発展する基礎にしようといふもの
である。
今年はとりあえず五十の部落を指定し
て簡易農家経済簿の記入を行わせ、まず
経営のそがい要因の究明に乗り出した。
今後これにもとづいて経営向上のため
の施策が集中的に効果的に行われよう
としている。

このほか酪農は単なる牛飼いであつて
はならないので、安定した経営の基ばん
にたふなければならず、また土地と結び
ついた開拓酪農の推進、金融面の措置を
一連のものに行い、酪農関係の指導と事
務を強力に推進するため、従来の金融面
は農政課、開拓酪農は開拓課、末端の技術
指導を受けもつもの及び飼料作物の指導
関係は農畜課、酪農に関する事は畜産課
となつていたものを一つの機構にまとめ
たものとして酪農推進本部を設置した。

農業経営を高い集約的
多角的なものに推進するた
めにも、経営を一層拡大す
るにも、中期の低利な資
金がつよく望まれているに
もかゝらず中小農にはほ
とんどその途がとざされて
いる。

米価などの価格政策にし
ても岩手県の過半数の農家
が米を全然売らないか、わ
ずかしか売らないため米価
高による施策ではうるはは
ない。

そこでこれらの陽のあた
らない多くの零細農漁家を
ひきあげようとして打出さ
れたのが、この対策である。



陽のあたらない零細農の経営をひきあげようとの対
策が進められている。

七 宮古港の一万吨岸壁着工

岩手県の重要港湾の一つである宮古
港に一万吨岸壁が構築されている。

宮古港には三千トンの船舶が着岸で
きる岸壁が二つあつたが新一万吨級
級の船が着岸できる岸壁を今年八月か
ら国の直轄事業として総工費六億二千
万円が始めた。

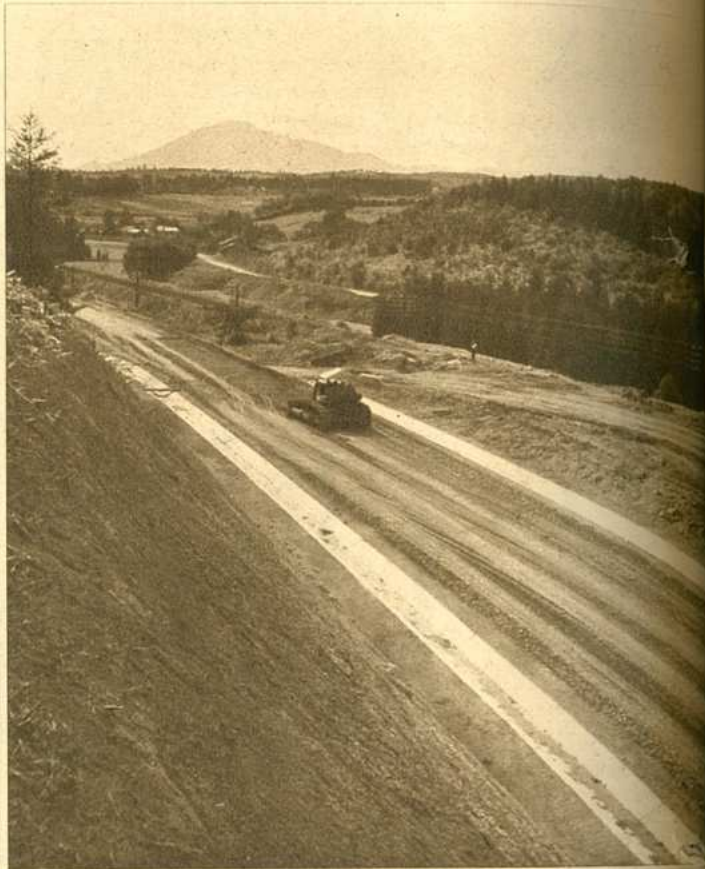
大正末期から戦争前までの外国航路

の船舶は大体三千トン級であつたが、戦
後は一万吨級の船舶が主であり、現在
ラサ工業の燐鉱石等は二港揚といつて、
よその港で半分おろし、あとの半分を積
んで宮古港に入るといふような不便をし
ている。

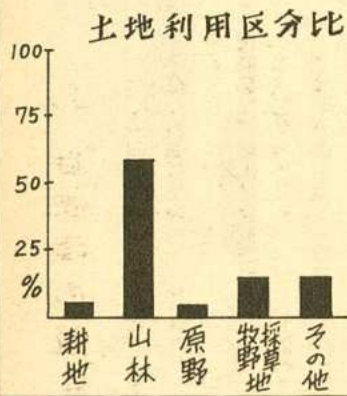
更に宮古港の現在の船舶の出入荷物の
量を見ると燐鉱石が六万トン、十萬トン

岩手の産業

本県の概況



国道4号線切替工事…二戸郡奥中山



この工場建設地帯は全国有数の石灰石地帯で、苦汁処理工業(石膏、水酸化マグネシウム、副生食塩、塩化加里、臭素、マグネシアクリンカー、その他炭マグ、金マグ)が新しく勃興する素地を作ることになる。この工場の建設は大きな意義をもつものである。

昭和二十五年北上特定地域総合開発計画がたてられた際

三年來の問題となつていた岩手山麓一本木原に自衛隊を誘致する問題は県が仲介に入つて防衛庁と地元との間の売渡補償問題に了解がつき演習場、キャンプ共に事実上妥結するに至つた。演習場については県では、地元の要望により防衛庁と売渡補償について接衝していたが一応了解がつき今年の三月五日盛岡市ほか地元村長、議員をまじえてその経過を説明した了解を求めたところ、地元側もこれを認めたので三月二十八日に正式に売渡契約調印を行い、引続きキャンプについては地元部落民及び入植開拓者と話し合い、

約十二万七千坪の土地の売渡しについて了解を得、工事着工の同意のもとに九月より着手し年内に基礎工事を終り来春の雪どけをまつて仕上りにかかり五月頃には部隊が駐屯することになる。

なおこゝに建設される営舎(キャンプ)は鉄筋コンクリート三階建三棟で千六百五十ベツトをもつ大規模なものである。誘置の是非、利害得失は一概に断定できないにしても、長年の懸案であつたこの問題も一応解決を見たことは、やはり大きな意義をもつものである。

この国立のたばこ試験地は東北には一カ所もなく、今度盛岡に建設されるのが、最初であるという。規模は土地二万一千坪、建物の建坪は千二百三十坪、予算は一億円である。

ともかく県北地帯の畑作経営の問題が大きくとりあげられている折柄、この問題解決の一つのカギになることは確である。

二万人である。この人口は昭和初年の人口の一倍半に當つてゐる。

人口密度は一平方キロ当り九十三二人であつて、全国平均の二百四十二人にくらべると、まだまだ人口収容力がある。

岩手県の面積は百五十三万七千町歩(一万五千平方キロ)である。その土地利用状況をみると……

耕地	一三三三町歩	八・七%
山林	九六一〇〇町歩	六二・五%
原野	九六〇〇町歩	六・二%
牧野採草地	一六九〇〇町歩	一一・〇%
その他	一七八〇〇町歩	一一・六%
合計	一、五三七〇〇町歩	一〇〇・〇%

面積からみると、岩手県は山林県である。しかし、民有林の中で、生産性の高い用材林は十二万町歩にみえない。耕地の八割は土地改良を必要としているし、広い牧野採草地は昔のままである。

交通不便のため地下資源も埋もれたままであり、一部大企業を除いては鉱工業ものび悩んでいる。

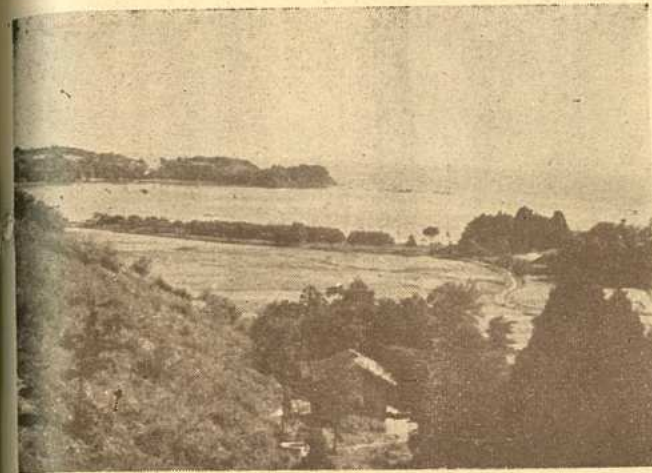
いいかえると、それだけ開発の余地が残されており、現在その開発を進めるために全県にわたり総合開発が行われつつある。

これが岩手県の姿である。

資料
本書に使用している数字は、昭和二十九年岩手県統計年鑑、昭和三十年国勢調査報告書、県総合開発計画書、農漁家振興計画書などを使用している。

八 製塩工場の設置決定

岩手県の県勢の発展は工鉄業の振興にあるといわれており、そのため、中小企業の振興策、工場誘引等の施策がとられているが、大船渡市の末崎町門之浜湾地区に機械製塩工場が設立されることになった。



製塩工場敷地の全景

輸入、肥料二万トン輸出、木材三万トン輸出、粘土三万トン輸出、石炭一万五万トン輸入等を始め年間二十四万五万トンの荷を扱い船舶では三十年が三百隻、二十四万トン位汽船一万三〜四千隻三十

五万トンとなつてゐるが、今後更に荷扱いが増加すると予想され又東北本線の輸送の限界等から見ても宮古港の一万吨岸壁の完成は岩手の産業経済に大きな好影響をもたらすものと期待されている。

にも、工業振興計画の中の重要工場としてその建設を予想されていたセメント工場とともに設置の実現を見たことは、岩手県の工業振興のために非常に意義の深いことであり、工場の建設完成の一日も早くからんことを待つものである。

九 自衛隊の設置きまる

盛岡市の上田に国立たばこ試験地が誘致されることになったことは岩手県の畑作地帯の人々にとつて何よりの福音であるといふ。

岩手県の畑作の換金作物としては果樹に次いで南部かんらん五百万貫というものがその最たるものであるが、そのかんらんは近年、輸送、販売の面で必ずしも有利とはいえず、その対策が種々とられているが、このときにあつて、この試験場の設置とともにバーレー種の増反も計画されているので、かんらんに代つて

十 国営たばこ試験地設置決定

葉たばこを栽培できるようになることは、畑作地帯にとつては一大福音といわねばならない。

この国立のたばこ試験地は東北には一カ所もなく、今度盛岡に建設されるのが、最初であるという。規模は土地二万一千坪、建物の建坪は千二百三十坪、予算は一億円である。

ともかく県北地帯の畑作経営の問題が大きくとりあげられている折柄、この問題解決の一つのカギになることは確である。